# 松田町立松田小学校

研究テーマ：分かり合う喜びのある授業の創造～「見て聴いて　考えて　つなぐ学習」を通して～

## １　実践の目的

本年度、校内研のテーマを「分かり合う喜びのある授業の創造　～『見て聴いて、考えて、つなぐ』学習を通して～」として、取り組んできた。「分かり合う」の「分かる」とは、児童が授業の中で「分かった」「できた」という思いを持てる授業をめざすことである。「分かり合う」の「合う」は、学習の根底に流れる人間尊重の精神を大切にしたものである。そのために、児童同士の「つなぐ」ことを重視した。児童の対話的な学習活動を通し、「生きて働く『知識・技能』」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」を育むことで、「学びに向かう人間性」が育まれると考え、実践を行ってきた。

## ２　実践の内容

（１）校内研究の体制

校内研究を進めるにあたり、低・中・高学年団の研究推進委員と、学校長、教頭、教務主任、研究主任で研究推進委員会を組織した。研究推進委員会で本校の今年度の研究テーマや方向性を話し合い、校内研究全体会で提案・決定し、教員全体で校内研究を進められるようにした。研究授業を行う際、低・中・高の学年団で指導内容の検討や確認を行うことで、２学年ごとの学習の系統性を把握できるようにした。

（２）研究授業の様子

今年度、研究を推進するにあたって、研究の窓口となる教科を国語科と体育科とした（特別支援学級では自立活動）。各学年で１回ずつ提案し、それを教員全員で参観した。その後、研究全体会で協議を行うことにより、授業力の向上を図れるよう取り組んだ。

研究のサブテーマである「つなぐ」ことを意識し、各研究授業で取り組んでいった。児童自身に「解決したい」という思いを持たせることで、学習に対する積極性につながり、児童が協力して課題解決に取り組む姿勢が育まれると期待した。

国語科では、児童が知識や興味の幅を広げ、語彙を豊かにするため、「教材をとらえる」、「対話的な学び」、「協働的な学び」を関連させながら、指導の工夫を重ねることとした。

例えば、３年生の国語科「こまを楽しむ」では、教材を読んだ児童が「これらのこまで遊んでみたい」という気持ちを持った。そこから、単元を貫くテーマとして「遊んでみたいと思うこまについて、友達と伝え合おう」を設定した。それぞれのこまの特徴と遊んでみたい理由がはっきりと表せることをめあてにすることにより、段落ごとの中心をとらえ、書かれている内容を正しく読み取ろうとする意識を、児童に持たせることができると考えた。また、自分の考えを伝え合う際にも、ペアやグループ対話の場を設定するようにした。そのことにより、友達の考えを参考にして、表現したい内容を新たに見い出したり新たな気づきにつなげたりする姿が見られた。

体育科では、児童が豊かなスポーツライ

フにつながる資質・能力を育むため、「場の設定」、「運動の特性を味わう」、「協調性を育む」ことを関連させながら、指導の工夫を重ねた。

例えば、全ての学年の実践で行われた5UP（ウォーム UP、モチベーション UP、スキル UP、コミュニケーション UP、フィットネス UP の全てを含む準備運動）を学習の導入に行うことで、これから行う運動の特性を自然と身につけさせたり、その運動ならではのおもしろさを味わわせたりするように取り組んだ。

さらに ICT の活用により、対話的な活動を行う姿が見られた。６年生のボールゲームの実践では、タブレット端末を活用することで、チームの特性や作戦への観点が客観的に把握できて、チームの話し合いが充実する姿が見られた。またチームでルール調整を行うことで、チームの特性にあった方法で、ソフトバレーボールの楽しさに触れる姿が見られた。また４年生の跳び箱の実践では、タブレット端末を活用し、自分やグループの友達の試技の動画を撮影し、互いに見合うことで課題を出し合い、友達と自分の試技を比べながら、自分の試技につなげたり生かしたりする姿が見られた。

（３）研究協議の様子

研究のアドバイザーとして、国語科では元帝京大学小学校相談役　矢野英明氏、体育科では、横浜国立大学教育学部附属学校部長　梅澤秋久教授に、授業についての指導助言や講話をしていただいた。

研究授業を重ね、協議し、多くの助言をいただくことで、国語科と体育科の特性に合わせた指導の工夫のあり方等を見出すことができた。

## ３　実践の成果

（１）国語科

成果としては、見通しをもって学習することができるように、「単元を貫くテーマ」を設定することで、児童が単元を通して考えることを共有し、学級全体で教材を捉え、対話的な学びへつなげることができた。また、表情や動きを合わせた表現、ペアトークによる意見の交流など、多様な方法で表現する工夫により、新たな気づきにつながり、対話的・協働的な学びを深めることができた。課題としては、教材に対する読解力が不足する面も見られた。

（２）体育科

成果としては、５ＵＰ運動により、本時の運動につながる基本的な動作や感覚を養うことができた。場の設定を工夫した５ＵＰ運動が、その運動の特性を味わうことへとつながった。また、ICT 機器の効果的な活用により、自他の動きを比べたり、チームの特性をつかんだりすることができた。そのことにより、互いの良さを認め合おうとする共生の視点を持った活動につなげることができた。課題として、児童がアドバイスをしたり作戦を考えたりする対話的な時間と、運動量の確保とのバランスが難しい点が挙げられる。

## ４　今後の展開

今後は、児童の読みを深める活動につなげるため、考えるべき視点を明確にしたり、体育科における運動量の確保に向けて効果的な場の設定や話し合いの方法を選択したりするなど、指導方法の工夫・改善に努めていきたい。また、そうした研究の深まりを通して、学びの質を高めていきたい。